

## リハ専門相談 事例紹介シリーズ ①

# 生活を豊かにするIT支援

今回は、「iPad を使ってメールやLINE などができるようになりたい」、「音声入力以外も自分で操作したい」というニーズに対して、ヘルパーの方と一緒にいった支援について紹介します。

50 歳代の脳性麻痺の男性です。就労されており、日中は割り座でテーブルにもたれかかり、両手で上半身を支持しながらパソコンや iPad を使い作業しています。もともとタッチパッド機能付のテンキーボードを顎で操作し、パソコン操作をしていました。しかしマウス操作での文字入力は作業効率が悪く時間と労力が必要になります。そのため自身で音声入力ができるツールを探し、iPad の音声入力に出会い、認識精度の良さから iPad の音声入力を利用するようになりました。それからご本人とヘルパーとで工夫しながら音声入力が操作しやすいように治具付の iPad スタンドを作製しました。しかし音声入力に特化していたため、アプリを閉じるなどの文字入力以外の操作は介助が必要な状況で、リハ専門相談を受け、訪問しました。



写真1

まずは、身体機能や作業環境を確認した後、音声入力のための環境を残しつつ、それ以外の iPad の操作をスイッチ1つでできる方法を提案しました。まず外部スイッチを接続して iPad を操作できる「でき iPad。」(写真1)を紹介し、実際に操作できるように設定しました。それと合わせて頸部の負担軽減を考慮してスイッチの選定や設置場所を決めました。次に iPad に標準で搭載されているアクセシビリティ機能であるスイッチコントロールを設定し、ご本人と一緒に実際に使いながら基本的な操作方法を理解してもらいました。そしてご本人のニーズであったLINEを試してみても、「これならできる」と言ってもらい、紹介した機器を購入することになりました。



写真2

またヘルパーからは治具付スタンドの代わりとなる、画面から顔を離したところでもタップできる機器を探していると相談があり、「i+Pad タッチャー」(写真2)を紹介しました。その3か月後に再び訪問し、作業環境に問題がないことを確認しました。

今回、作業環境を変更したことにより、ヘルパーに iPad の操作を頼む必要がなくなり、作業の始まりから終わりまで自分自身の操作できるようになりました。単なる音声入力での入力機器であった iPad が、今では音楽を再生したり、LINE で色々な人とコミュニケーションをとったりと用途が広がり日頃の生活に欠かせないものになりました。今後もご本人と介助者では解決できない問題に対して支援する予定です。

(柏原康徳・一木愛子)